

## 論題名 『宝物集』研究」

大正大学大学院文学研究科国文学専攻 北林 茉莉代

学位請求論文では、『宝物集』研究」と題し、〈生成〉〈展開〉〈受容〉の観点から、諸本の生成過程、第二種七巻本系統における展開、近世唱導資料にみる後世受容を考察した。本論文は、序章・結章および三章八節、資料編からなる。以下、構成順に要旨を報告する。

序章では、作品の梗概や、作者説・諸本分類・諸本系統論について、研究史を踏まえて整理した。『宝物集』は平安末期〜鎌倉初期に平康頼が著したとされる仏教説話集であるが、その伝本は七十種を超える。小泉弘氏は、これらの諸本を七系統に分類した。すなわち、一巻本、二巻本、平仮名古活字三巻本、平仮名整版三巻本、片仮名古活字三巻本、第一種七巻本（以下、「元禄本」）、第二種七巻本である。本研究は、この分類にしたがって諸本比較を行った。従来は二系統や三系統で論じることが多いが、本研究はほとんどの節で七系統を横断的に概観する点の特徴である。なお、作者説や系統論については、未だ定説を見ていない。小泉氏は、一巻本は康頼の手になる第一稿本、第二種七巻本は康頼による改稿本で、三巻本は第二種七巻本の抄本であるとする。ほかに、一・三・七の順に増広された「増補説」や、七巻本から三巻本へ抄出された「抜書説」、幻の祖本から一巻本は抄出された七巻本は増広されたとする説、開版の際に改変された説など枚挙に暇がない。本研究では、現存諸本の本文を手掛かりに、増補説・抜書説どちらに妥当性があるか、両説を検証した。なお、作者の特定は目的とせず、あくまで本文の性格を把握することに力点を置く。

第一章では、諸本比較を行い、諸伝本、とくに片仮名古活字三巻本と第二種七巻本の性質を把握しつつ、成立過程を検討した。

第一節では、「釈迦像の由来」の段における意味不通箇所を取りあげた。七系統十種の諸本における固有名詞の誤りから、作者もしくは改編者（以下、「作者」）は『晋書』などの歴史書を参照していないこと、「白純王ト申王ノ名ノ名香ナリ」と「白純王の名も不審なきにあらざ」の異同には、「名」と「審」の草体誤写や、第二種七巻本の敬語表現、評語が影響していること、脱文を多く有する九冊本は良質な本文ではないことを指摘した。

第二節では、「十二門開示」の前半部に見られる、字句や細い章句の誤りに注目した。ここでは、「東大寺禅林寺（禅林）」、「何ゾ互（遅）ニホコリテ」、「ハアホノツニシテ（あはゝの辻にて）」、「鹿野苑の「師子（鹿）」、「恒伽河ノ水ヲ吞（浴）ミ」、「則天皇ノ后（則天皇）ハ、玄（高）宗ノ后」の六例を取りあげた。誤謬が生じた理由は、①事実誤認、②漢字の草体酷似による誤読、③平仮名の草体酷似による誤読の三種類である。ここから、〈誤りを犯す片仮名古活字三巻本〉の性質と、親本が平仮名であったことが了解される。

第三節では、「十二門開示」の後半部に見られる例証話の入れ替え基準や、大幅な増補の実態、經典引用態度を考察した。ここでは、話型を同じくする三つの説話、片仮名古活字三巻本「布施」の無勝童子・徳勝童子説話、同「善知識」の妙莊嚴王説話、第二種七巻本「布施」の檀弥離長者説話を検証した。その結果、文脈や「十二門開示」の意図に沿うよう例話が精選されることを明らかにした。また、「観念」の段の全文比較ならびに依拠文献整理の結果、第二種七巻本では、本文の分量は片仮名古活字三巻本のおよそ五・九倍、依

抛文献は『涅槃經』一書に対して大乘經典など二十三種の書名が挙がると指摘した。さらに、偈や文章が一部変更もしくは削除された例から、第二種七巻本において經典を重視する姿勢や、重複箇所を削除する意図などを了解した。これらは、増補説でなければ説明がつかず、〈増補・修正する第二種七巻本〉の性質を解することができた。

第二章では、未開拓資料である妙国寺本（巻三零本）を諸本系統に位置づけることを目的とした。すでに和歌の総数から第二種七巻本系統とされるが、独自本文や歌順の乱れなど未解決の問題が残る。この妙国寺本検証過程で、一巻本の重要性和特性をも把握した。

第一節では、妙国寺本の書誌情報と、山田昭全氏・大場朗氏・森晴彦氏による先行研究を紹介したのち、妙国寺本の独自本文を考察した。七系統すべてに共通する義孝往生譚を通観すると、一巻本・妙国寺本のみが逍遙の場面を有している。義孝説話を載せる『大鏡』『今昔物語集』の記述とは一致せず、一巻本との明確な書承関係がうかがえる。しかし、義孝が唱える文句が一巻本で「滅罪生善往生極楽」、妙国寺本ほか第二種七巻本系統では「命終決定往生極楽」である点については、①省略した場面に合わせるため、②『二十五三昧講式』に従ったため、③「十二門開示」の上位概念と対応させたためという可能性を挙げた。また、二五七番歌「ウタ、ネノ」を二回引くのは和歌の配置を試行した痕跡と考えられる。妙国寺本作者の手元には一巻本があり、これをもとに行った加筆修正および記事の復元の跡は〈妙国寺本草稿本説〉の証左となることを報告した。

第二節では、第一項で五首一群の和歌や例証話を導く導入部（以下、「見出し語」）の検討を行い、第二項で「愛別離苦」の構成を整理した。第一項では、見出し語「冒頭」は①一巻本の見出し語が細かく分解される形で後出本の別項目へ移動すること、②一巻本見出し語末尾の「愛ノワカレ」は独立の項目ではなく定義説明であること、③地名や引き歌表現から一巻本「鈴鹿山」、三巻本「小夜ノ中山」、七巻本「白河の関」となり、最終的には「東下り」を描くことなどの新解釈を提示した。見出し語「名越の祓」では、①妙国寺本独自本文「アサノヲエタニユフカケテ」は「けふくればあさのたちえにゆふかけてなつみなづきのみそぎをぞする」の引き歌表現であること、②「イルヒ」であるべき一八二番歌の結句を「イズルヒ」と誤る妙国寺本の親本は、和歌を平仮名表記していたであろうこと、③見出し語と和歌の対応関係は諸本共通であることなどを明らかにした。見出し語「帰雁」では、①妙国寺本は見出し語を欠く点、②第二種七巻本系統諸本と歌数は共通するが歌順が異なる点に、草稿の痕跡を見た。第二項では、「愛別離苦」の構成を考えるため、「ヒルノワカレ」「流罪」「入涅槃」の解釈を行った。ここでは、これまで「昼」と解されていた一巻本の「ヒルノワカレ」は和歌・漢詩の内容から「鄙」と解すべきであることを提唱した。「流罪」では、①一巻本に存在した「流罪」の項は後出本では削除されたこと、②康頼の二二三番歌は前項と次項をつなぐものとして配列基準を無視した形で配されること、③それは和歌によって赦免された康頼と雁書によって虜囚の身を解かれた蘇武譚は親和性が高いためであることを想定した。さらに、「入涅槃」の記述からも、①一・三・七の増補の跡が認められること、②妙国寺本は第二種七巻本系統諸本において唯一、二八四番歌を欠く四首一群であり、歌数から草稿本の可能性が高まったことを指摘した。

第三節では、「帰雁」「親におくる」「子におくれて」各項目の五首の歌順を、七系統十四種の諸本をとおして比較した。この歌順表から、妙国寺本は、五首の冒頭に勅撰集を置く〈和歌配列基準が確定する前段階の本〉と推断できる。以上を踏まえて整理すると諸本の

成立順に「一巻本↓片仮名古活字三巻本↓妙国寺本↓第二種七巻本」となる。

第三章では、後世受容の一例として『類雑集』を取りあげ、これが依拠した『宝物集』の伝本を特定した。また、『類雑集』の書肆・出典・表現を手掛かりに成立圏を探り、同時にそれが『宝物集』の流通圏であったことを推定した。

第一節では、先学が指摘する『宝物集』を受容した日蓮遺文などの後代文学を紹介したうえで、『類雑集』の先行研究を整理し、和歌の出典考証を行った。『類雑集』研究は極めて少ないが、基盤となるのが牧野和夫氏の日蓮宗を制作圏とする論である。『類雑集』の和歌三十四首の出典を調査すると、七首が『宝物集』と明記される和歌であり、そのほか一首に『宝物集』の影響が看取された。『類雑集』が拠った伝本は、集付けの一致度から久遠寺本に連なる一本と考えられる。現存する久遠寺本は、日意が和歌を省略した抜書本であるため、抜書以前の親本か、同じ親本から派生した兄弟関係にある伝本を想定しておきたい。また、書名と腰の句「ウレタキハ／サビシキニ」の併記は、『法華初心成仏抄』のうち行学院日朝の「朝師本」に依拠するものであった。これらは、日蓮宗総本山久遠寺にあるであろう書籍を閲覧できた人物が、『類雑集』の制作に携わっていることを示唆している。

第二節では、『類雑集』の成立圏を確定するため、書肆の研究を確認した後、敬語表現・注記表現を分析した。まず、『類雑集』慶安四年版の版元である「石黒庄太夫」は日蓮宗寺院の一つ本能寺の敷地内で発生したこと、明暦三年版の版元である「秋田屋平左衛門」は石黒の近隣に位置すること、「秋田屋平左衛門」は『類雑集』以外にも石黒の後印本を刊行しており二者の交流が認められることなどを報告した。つぎに、約五〇〇例の敬語表現を抽出し、そのうち一五〇例が独自の敬語表現であること、割合では五十五％の「釈尊」に十四％の「僧」が続くが、この「僧」二十一例中十三例が日蓮および日蓮宗関係者への敬意であった。さらに、注記表現では、日蓮著作および日蓮宗関係者の著作が多く挙げられること、順徳天皇の歌学書『八雲御抄』に「ユ」と振るのは日蓮宗の慣習的な読みの影響であることを指摘した。これらのことから、『類雑集』の成立圏は『宝物集』の流通圏と一致することが理解できた。

結章では、全章を総括したうえで、今後妙国寺本研究においては「愛別離苦」以外の段の分析や、久遠寺本や本能寺本など諸本との関係性の把握が急務であることを確認した。資料編では、関係把握の一助とするため、妙国寺本と久遠寺本の全文対校を行った。

以上の成果を踏まえ、今後の展望を述べる。妙国寺本は三巻本と七巻本の中間に位置する（第二種七巻本系統における草稿本）と結論づけた。今後は、妙国寺本と書承関係が認められた一巻本のさらなる分析を行い、とくに「引き歌表現」に着目しながら『宝物集』の和歌世界に迫りたい。同時に、『宝物集』の和歌配列基準における『続詞花和歌集』の位置づけや六条家の重要性を検討し、妙国寺本以前と以後の配列基準を明らかにしたい。

今回は『類雑集』の敬語表現・注記表現を扱ったが、さらに引用態度の分析を行う必要がある。現在作成中の「引用文献目録」を完成させ、引用書の分類および解析を進める。

今後は『宝物集』の後世受容の例として、俳諧における『宝物集』受容を扱う必要があると考える。唱導資料や俳諧など作品の枠を越えて『宝物集』の影響を分析することで、後世、とくに江戸時代における『宝物集』の普及と受容の実態を捉えることが可能となる。

如上の成果が達成されれば、仏教文学研究、国語学研究、和歌文学研究、書誌学研究、唱導文学研究、日蓮宗研究、地域研究など様々な分野の研究に資することは確実である。